

近昔より歌と嗜む。誦諧と好む人其名高小中尋常なるも集めて
 歌能百人撰とて安永の石雪居海壽とる人のおせし小冊字本とせし傳れり
 是を視る名と歌能あるも其人の傳はるる雪の朝は必無と撰る人つてその
 郭公の初音と聞か心地をまるとされ永女其傳と添あるく画像もあはれし
 たる自然にその人のありき事此想像せし廿日と暮むこと曉る捷徑あるるぬべし
 此の撰述ありきなりと書肆知新堂のいふと実中と思ふ系譜行状英名と共にあつる
 き村雲のるる碧空赤明亮月と観る中も萬のあぬるは又勝る美名多々大方に
 らる姓氏も詳るるぬる太山樓とるのあき谷回ある類也欽意の情の等國を
 どもれと委曲記まかた曾原本の憚るぬるの混りたるは其の便あり省れて更なる
 心を補入れて数に充む抑歌能の活物也其才徳に従ふ俊傑の吟詠の拙は
 あり人を察る古又此道もの海壽がえむも則是る多し花朝月夕諸臣の歌よ
 まるる既賢愚を試せむり天子のこころのいれされ漫半頁填ある
 于時嘉永己酉歲

柳下亭種只撰集

大正

和歌

賢之朝臣も古今集の序おととえさの
中ともやうにばたけたけのあはれなるも
好む物とあはれけれけし古田兼好左兵衛佐兼
好む北田仕へし或は秋波と通ふ女房
の最取うらふ小女も心まの侍の人も名を
への中宮の小女とをよする其後信と求め
○あやせむ本木のあやぐれのうれれ下はるれ
てたえぬことひさるるて月日まされも
あつれのあやせむはあやせむのよはる
まよきよきあやせむ井のあやせむ秋と
風あやせむあやせむあやせむ
のうれれあやせむあやせむ
あやせむあやせむあやせむ
林のあやせむあやせむあやせむ
あやせむあやせむあやせむ



あやせむあやせむあやせむ
あやせむあやせむあやせむ
あやせむあやせむあやせむ
あやせむあやせむあやせむ
あやせむあやせむあやせむ
あやせむあやせむあやせむ
あやせむあやせむあやせむ
あやせむあやせむあやせむ
あやせむあやせむあやせむ
あやせむあやせむあやせむ



○あやせむあやせむあやせむ
あやせむあやせむあやせむ
あやせむあやせむあやせむ
あやせむあやせむあやせむ
あやせむあやせむあやせむ
あやせむあやせむあやせむ
あやせむあやせむあやせむ
あやせむあやせむあやせむ
あやせむあやせむあやせむ
あやせむあやせむあやせむ

非

誹諧

物其姓不至る内
泣と海と雨と階を
やと吟と瘡
疾類と活を
るど古今を例
るさふあふ誹諧
法師歌詠と撰
んあふ誹諧
伴ひて諸国と
行脚せし小或時
根の切と過る
は坂小池と止常
しが柳前と夜此家の
妻難産中て服む事
とるありや内のか
宗祇師弟を佛道

終行の僧ぞと云
加持とたまれ
と乞ひしふ
宗祇そのあま
○摩訶般若
けら女
奇特なる
宗長かやう
まぐさま
○二もはんで
さんの切ら
と服をり
引小忽出
産せしふ
家内こそそ
よろこびと
ら



琴

破鏡尼江州膳所の藩中
 昔沼外記を妻夫の俳号を
 曲草とよびて芭蕉の門人
 るりその身は和歌を好と又
 はく琴の名人とてま世を
 さりし後の和泉の歌小菴を
 ひびき維繫と破鏡とあり
 此の佛まつるのくまゆら
 首春をよみこみし歌と縁
 て夏をよみこみ

○秋あつた杖のさむいと申入
 くらを縁まても神乃
 はゆけさ

其歌うのまいふもる不破鏡
 流とて隅の比中のごとくと

甘谷

元禄の以芳雲とりの傍曲其巻を
 好とて諸国とめる或時高野山の
 某院は其巻をよみて居るに
 とりて空と仰きてそや申創
 やあらぬ只都の鳥籠に甘谷
 のわれが今追て彼所をえと
 とまもる所なりけり此所
 外りの京迄八里敷も遠隔れ此所
 何程急ぎとも毎日の間小あつと
 りの芳雲微笑々愚俗の一日小
 五十里と歩行ハ至んる最や
 とあるとて此傍後小陸奥に
 虎の浦とて乃の辺の石を腰ら
 かり懐中の詩なりけり
 ○その身の旅路あるがまは
 かまけ浦のあり乃けりとも
 かく書とりては後漫一ぬ



書

大雅堂ハ俗稱秋平と呼京の産
天性書画ハ妙ヲ得て就中書言ハ
才の時よりかきしと今奇人少
世ハ種々の話あるも一ニ
若冠内扇百本小画をうき足
藤本うらんとて大後近江の方へ
あつた小人を悪とあはれ置
こつた空しく途中瀬田の橋
上よりこの橋へは移れま
るこのひかり程に
茶室大和屋某との菓子屋の暖
簾をかきとてあちやちや
大和との二字をうきとて
からせ四五日を経て此
六何れへもあつた
つ大和の二字を書きま
るの盛るものとあつた
様とてあつたとあつた

書画

僧明兆ハ淡路の産幼くして
東福寺の大僧和尙の弟子と
る地々世の人兆殿司と吉山と
まきまき佛僧を會得し
佛も又雅より再高
終も天性師と得て師大道
好むと練くこれと戒と吉山
前を以て此画の止せ或
行せられ半席と不動の像
画をこれ彩色する
師の歸れ吉山の狼狽
紙行て膝の下布一
画面の火焰とく
と得たり師の坊此有様
の厚敷の像を画し
の涅槃とて
吉山一首と詠か
○子とあつた
あり入る日の



けだもの歌合八番

一番水たのむ
た頼恋
おふさむ
かむも備の
これとこと
たまうかうとと
月の歌よふ



右豚
杯ぐらうら
心ひと
あつくと
うけひく
あまの
あまの



左猿

あまの
たちとも
あても
の月や
面うら
よひあままで



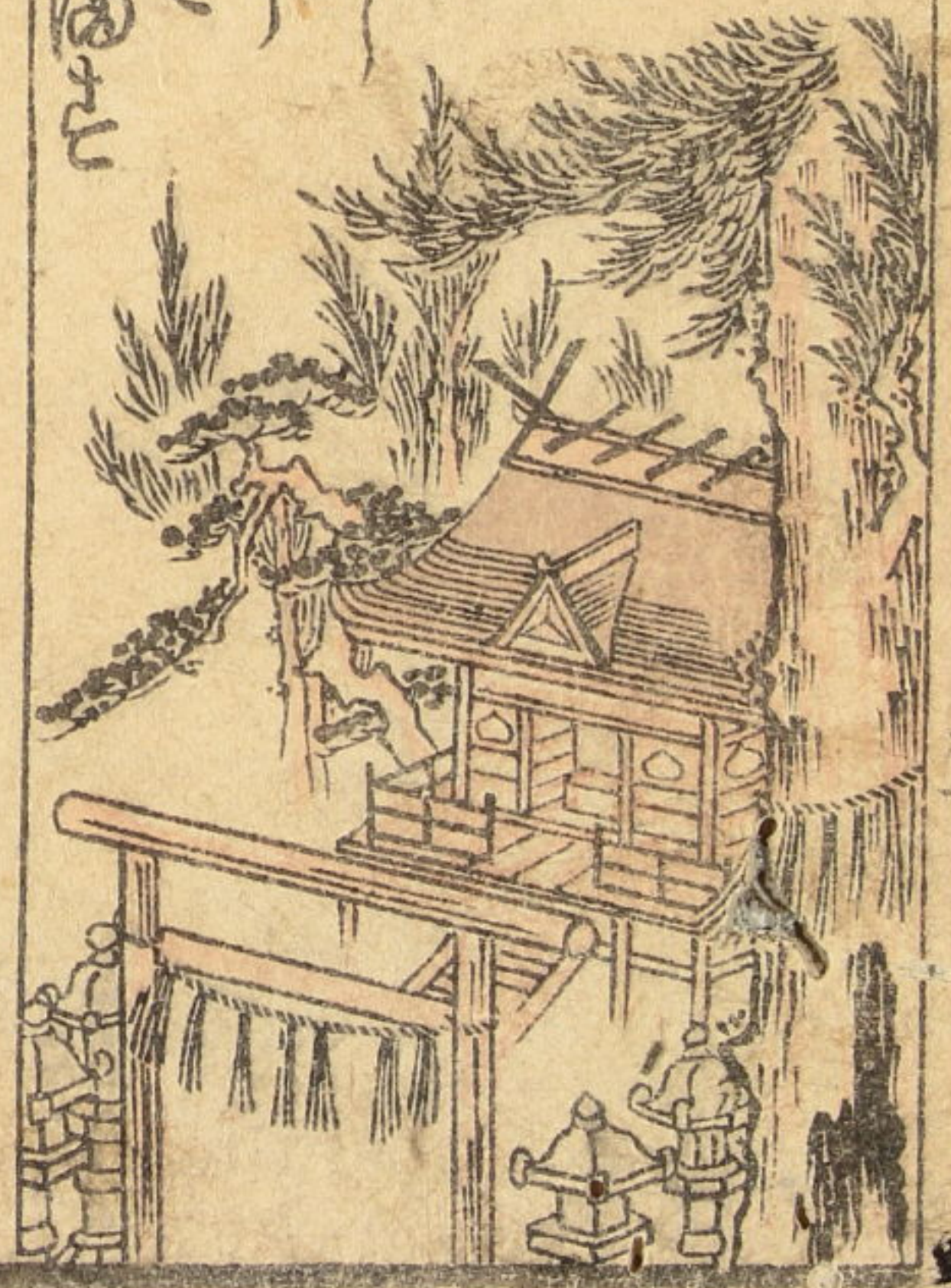
右犬

りまき
たのき
あつたれぬ
ありのげや
まふら
とせぬ
月をくさき



神祇

これ分
社よ神
の内
まの
まの

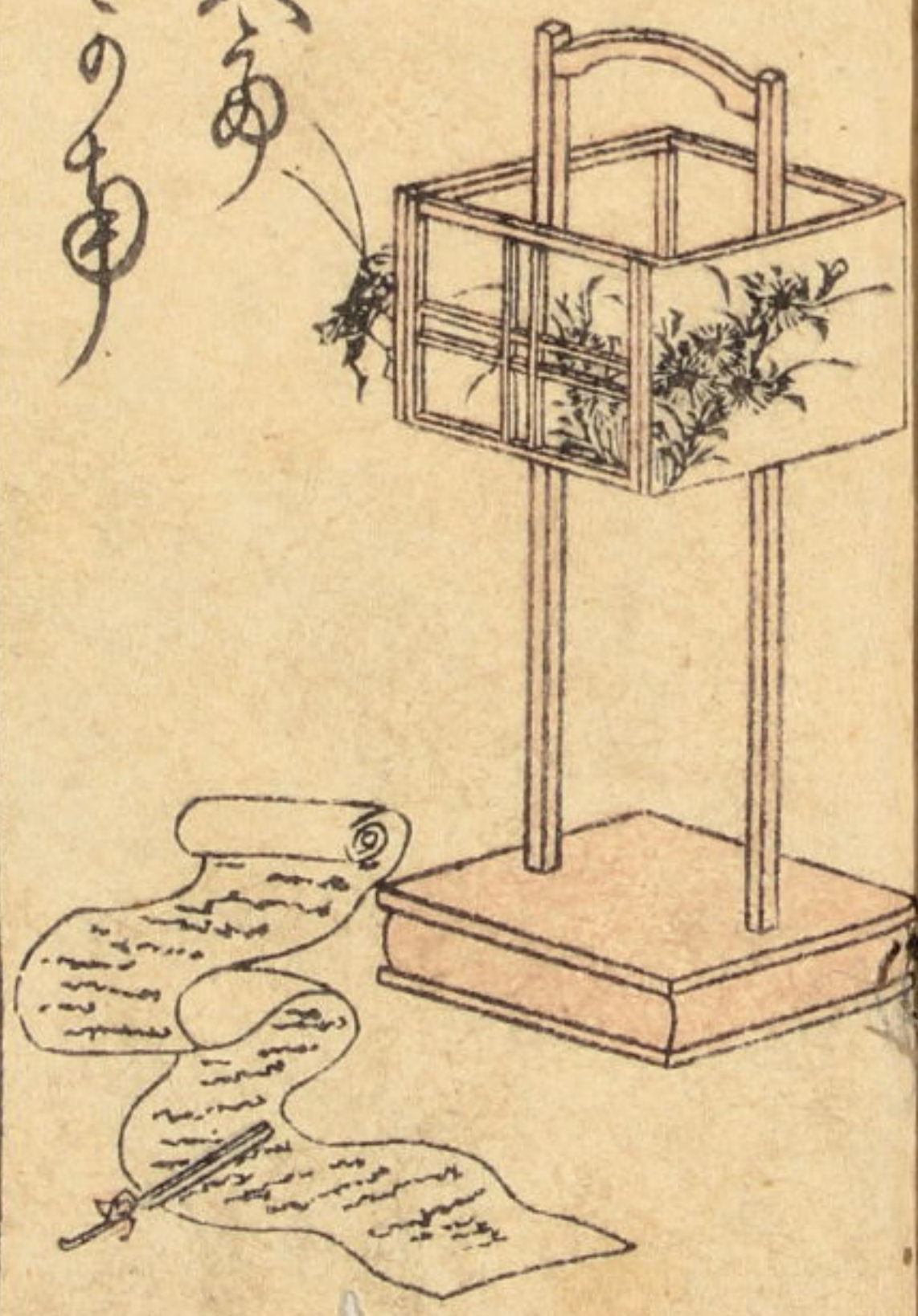


釋教
灌佛や
めて
る
まの



意

あ
やせと
人
洞の



無常

身いの
権乃た
人を送
迎



左猪

二重あひであつる
あひさひの
りりわ
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの



右鹿

あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの



左牛

あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの



あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの

あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの



四季草木異名之歌

松

あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの



梅

あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの



柳

あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの



橘

あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの



萱

あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの



藤

あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの



桃

あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの



蕨

あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの
あひさひの



五番あつぎる恋

左程

あつぎる恋
かひても
ありて
あつぎる



右程

北窓や

あつぎる恋
あつぎる恋
あつぎる恋
あつぎる恋



左羊

たのめし

あつぎる恋
あつぎる恋
あつぎる恋



六番あつぎる恋

右然

あつぎる恋
あつぎる恋
あつぎる恋



山吹 面影

あつぎる恋
あつぎる恋
あつぎる恋



郊花 垣

あつぎる恋
あつぎる恋
あつぎる恋



葵 形見

あつぎる恋
あつぎる恋
あつぎる恋



杜若 白

あつぎる恋
あつぎる恋
あつぎる恋



石竹 極子

あつぎる恋
あつぎる恋
あつぎる恋



蓮 池見

あつぎる恋
あつぎる恋
あつぎる恋



波 代

あつぎる恋
あつぎる恋
あつぎる恋



姫百合 光草

あつぎる恋
あつぎる恋
あつぎる恋



左鬼



左の鬼はうさぎ

七番これがおんまこ

右魁



右の魁はねこ

左狼



左の狼はあらい

右虎



右の虎はとら

牡丹 不覚子
名をうやうやしく
と名のあまのこ
と名のあまのこ
りたみてす



萩 初見子
けのやがてつゆをいりあ
まのあまのこ



松花 松花子
まのあまのこ
秋をまつる



女帝花 思子
維つとるまをいりあ
あまのあまのこ



紅葉 錦草
あまのあまのこ
あまのあまのこ



菊 百秋子
あまのあまのこ
あまのあまのこ



波 波子
あまのあまのこ
あまのあまのこ



竹 川玉子
あまのあまのこ
あまのあまのこ



秋風 秋風子
あまのあまのこ
あまのあまのこ



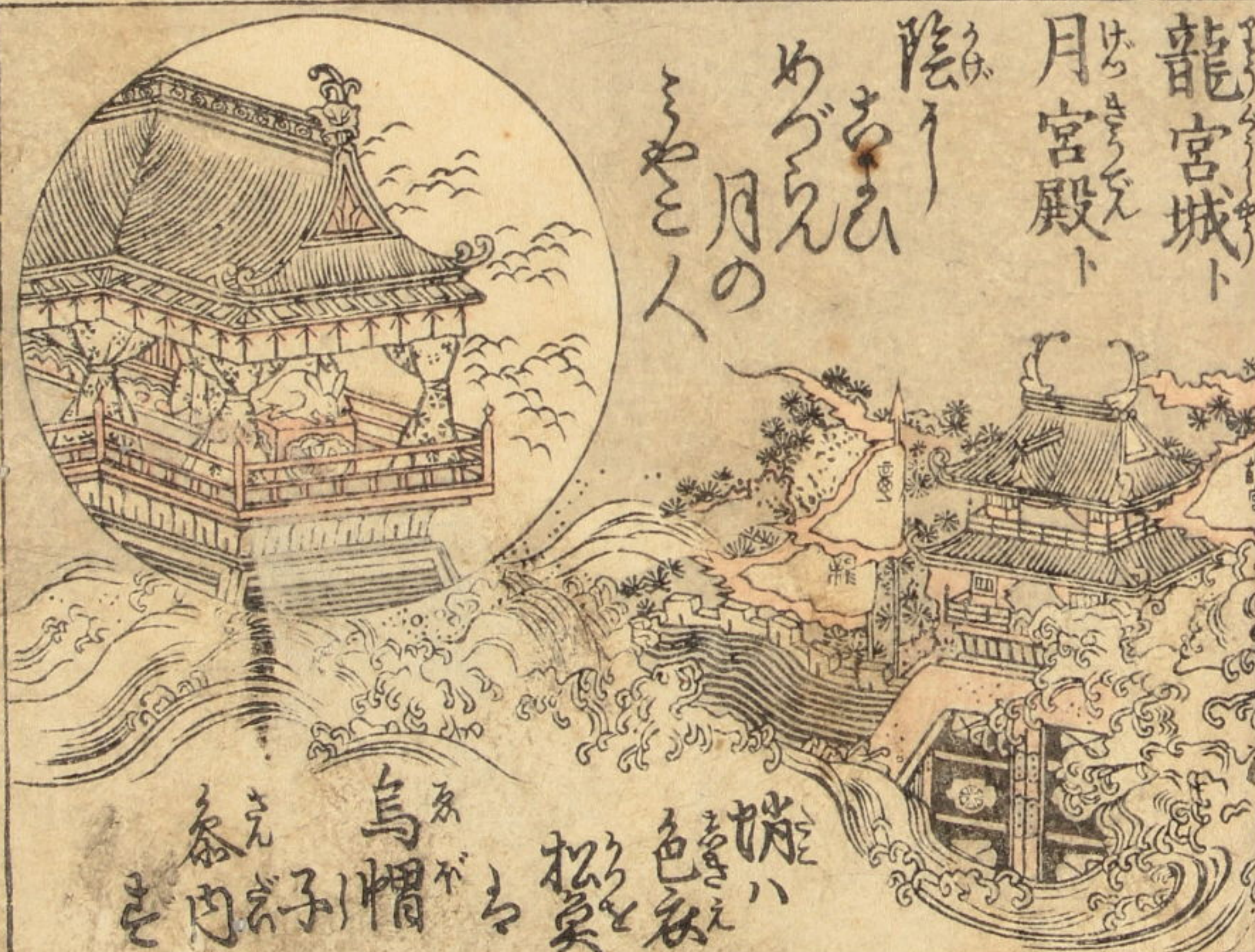
川玉 川玉子
あまのあまのこ
あまのあまのこ





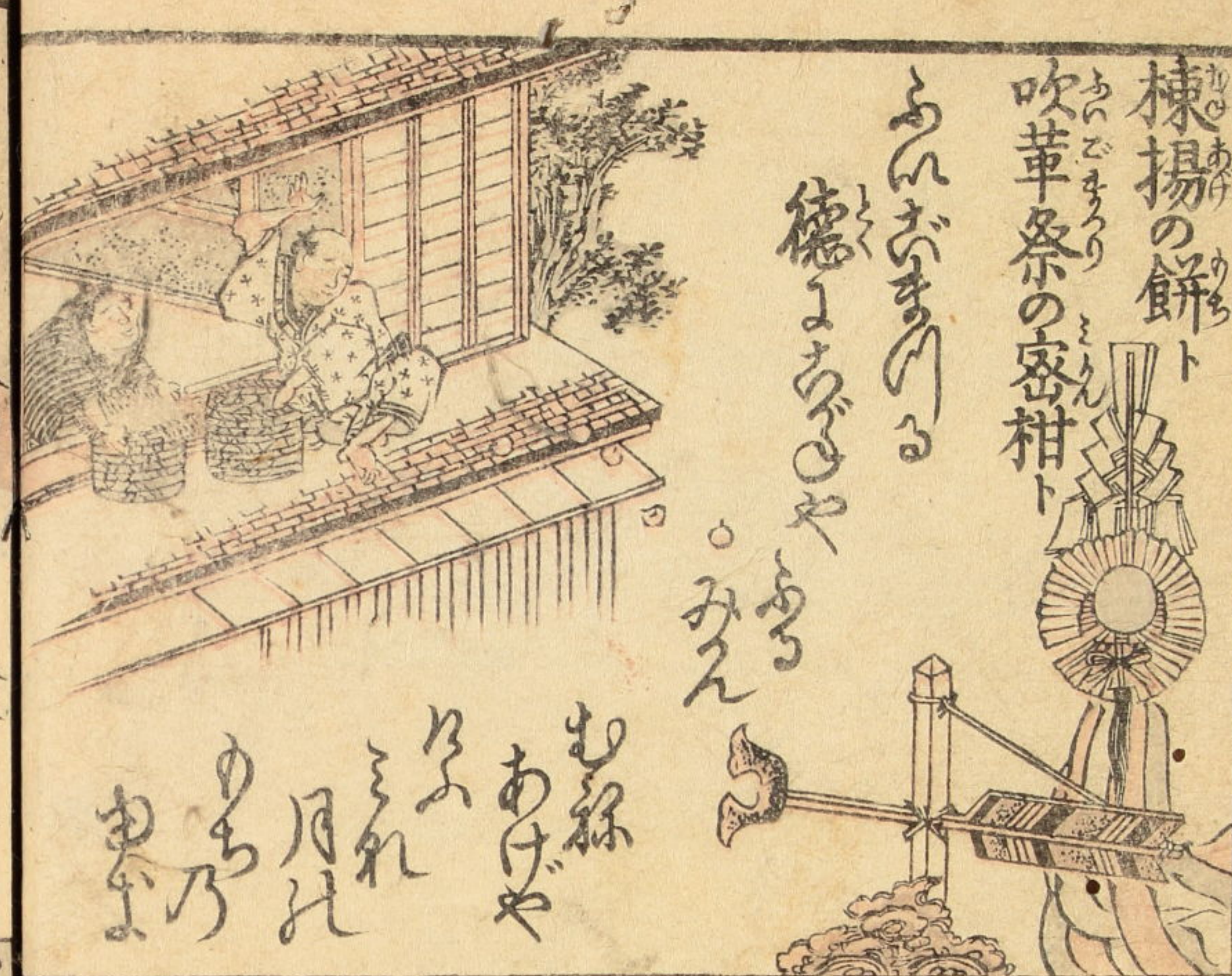
富士山ト
琵琶湖ト
あけ
かき
ひま
社

あけ
かき
ひま
社
あけ
かき
ひま
社



龍宮城ト
月宮殿ト
あけ
かき
ひま
社

あけ
かき
ひま
社



棟揚の餅ト
吹革祭の密柑ト

あけ
かき
ひま
社

あけ
かき
ひま
社

あけ
かき
ひま
社



武者修行ト
歌枕ト

あけ
かき
ひま
社

あけ
かき
ひま
社

歌傳おれど意致

○附名ありしもかけぬまのりち
 ことまきまきまの縁きつる
 ○花のちる情まろくやほとま
 ○まろくも更けかひれまきま
 あつぬらうれのまのりちのう
 ○あま夜やぬふふもははは
 山へのまきまをほらまきま
 ぶりのまきまのふかほ白も
 ○と山のまきまやま士あま
 ○まゆの屋上のまきままきま
 あつまかけくまもやまきま
 ○接楼ま余所のまきまもま
 ○わかまきままきまの秋まきま
 秋まきまのまきまのまきま
 ○まきまのまきまのまきま

安原貞室の初名正章一囊
 軒と号ま貞徳の門人巧は俳諧
 と詠ト且諸藝云秀言師と

○天長くらひとほむや秋の月
 とりるふ

○涼一あまのえれたつ申
 と心まのりけり或年吉野山推

○あまのえれたつ申
 裏を其年又東小下り二句を

得たり

○の月いよと此雲や富士の雲
 ○まののれは縁の影ふふ初春

又頃たふ

○松うはや月の三五夜中約言
 其子元次十二才の時乃吟ふ

○七やまはるたまま玉のま

女

安原貞室



花の
 終り
 なみ
 なる



風の
 言水
 果の
 白炭の忠知
 焼ぬ
 乃
 枝の
 蛇之助常則
 根の
 花の

相田勾當ハ伊勢國神路山の麓に住入るり生得て十二律の調子とて物の善悪と占ふ方又一ツもたが幸あがりて心守武が御風と云ふ若て後の貞徳が源朝をとりつけとの其白のことありとせん

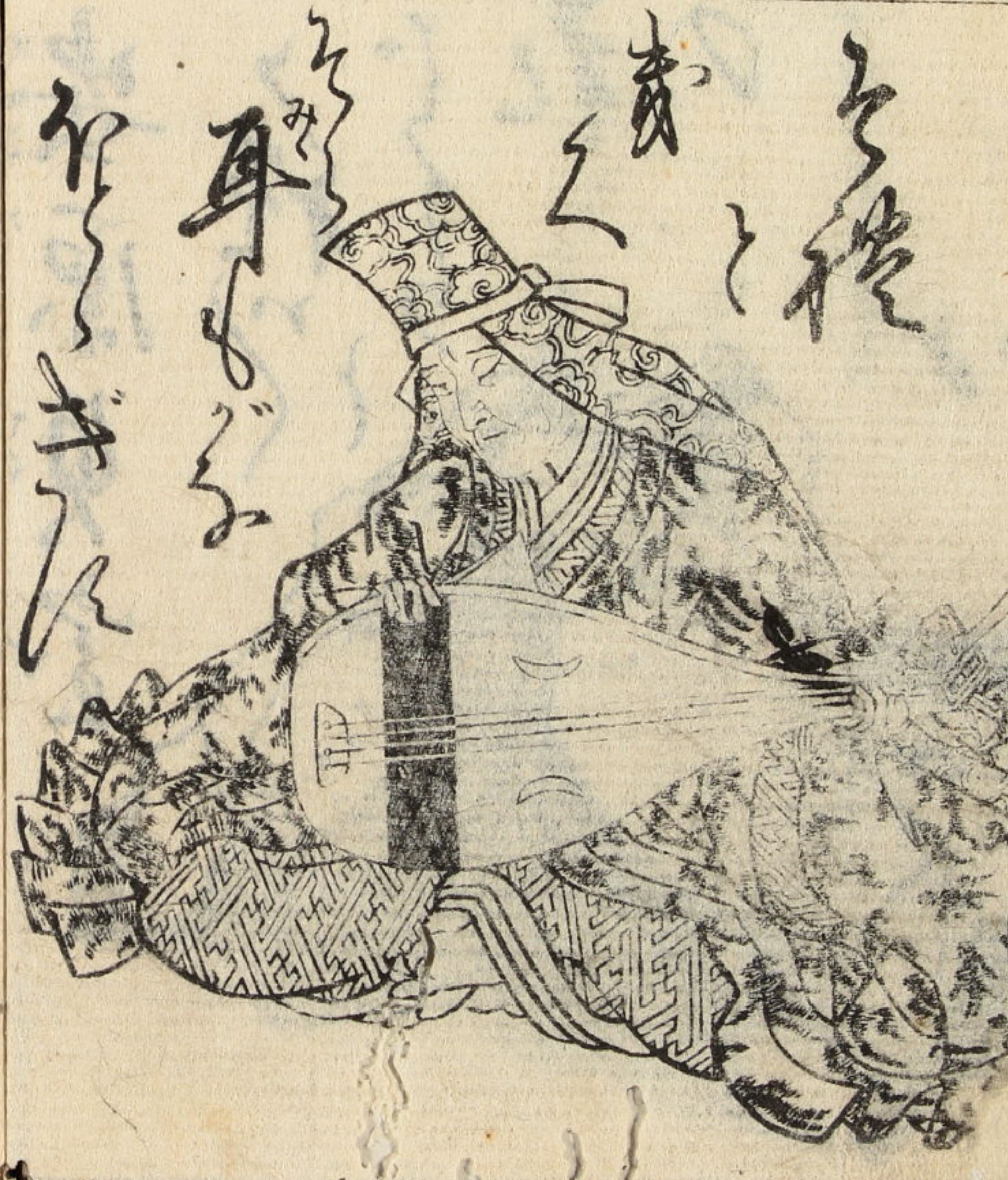
あつちの元にあはほと色香が○あつちの芳もきさやほの舟あつちの○そまことまきの吟をえどめとてしぐれも物あつちとらありそあ寛永七年六月八十二よあつちの終る

神野忠友ハ江戸の人俗称長三郎との兼應の江井坂春清ハ俳諧をまきふ

○何心つらぬふとん此草ひさ又○元日やのりりとを歳旦のあつちがある中の中○白雲のあつちと其名は方小雷同其角が雑談集の白炭とまこえー忠知が

○平賀月やあつちのまきの新法師と穉世しく腹切け何ふ憂世といひるどう表るるごとあつちを終どうせげ入と思ふ

相田勾當



耳もごま

かき

神野忠友

えもや

たけ

てん



あつち

宗長法師ハ駿河國嶋田
 鍛冶何某ハ子ハ勿きより
 風流の心ふく宗祇と師して
 乃ち又ハ一休禪師ハ
 勢州閑地寂とて野ふやち
 けふ折柄底の橋花さうり
 ○立花のかせられて後夜
 ○山搦ありのりそふあへり
 納ると我聖に生る行と切
 國の守の杖小奉るとて已
 杖の秋を詠れをそえて
 暮けるぞ



宗長法師

の杖ハ

秋ハ

秋ハ

秋ハ

秋ハ

野呂松勘兵衛ハ江戸の人和泉
 大矢浄雲ハ世居ハ出て頭ハ
 青黒さのやハける人形を
 つく是とのまハ人形とハ野呂
 松の畧語又同時謙斎在流
 と云者ハ販買ハる木偶とハ相
 共ハ賢愚の有様と狂言セ
 今猶愚ハる人をさくとのま
 と呼ハ勘兵衛がつくハ木偶
 の愚ハささまより出ハる言
 義ハありハ名月の句ハ成と死
 諸侯方ハ八月十五日



野呂松勘兵衛

秋ハ

秋ハ

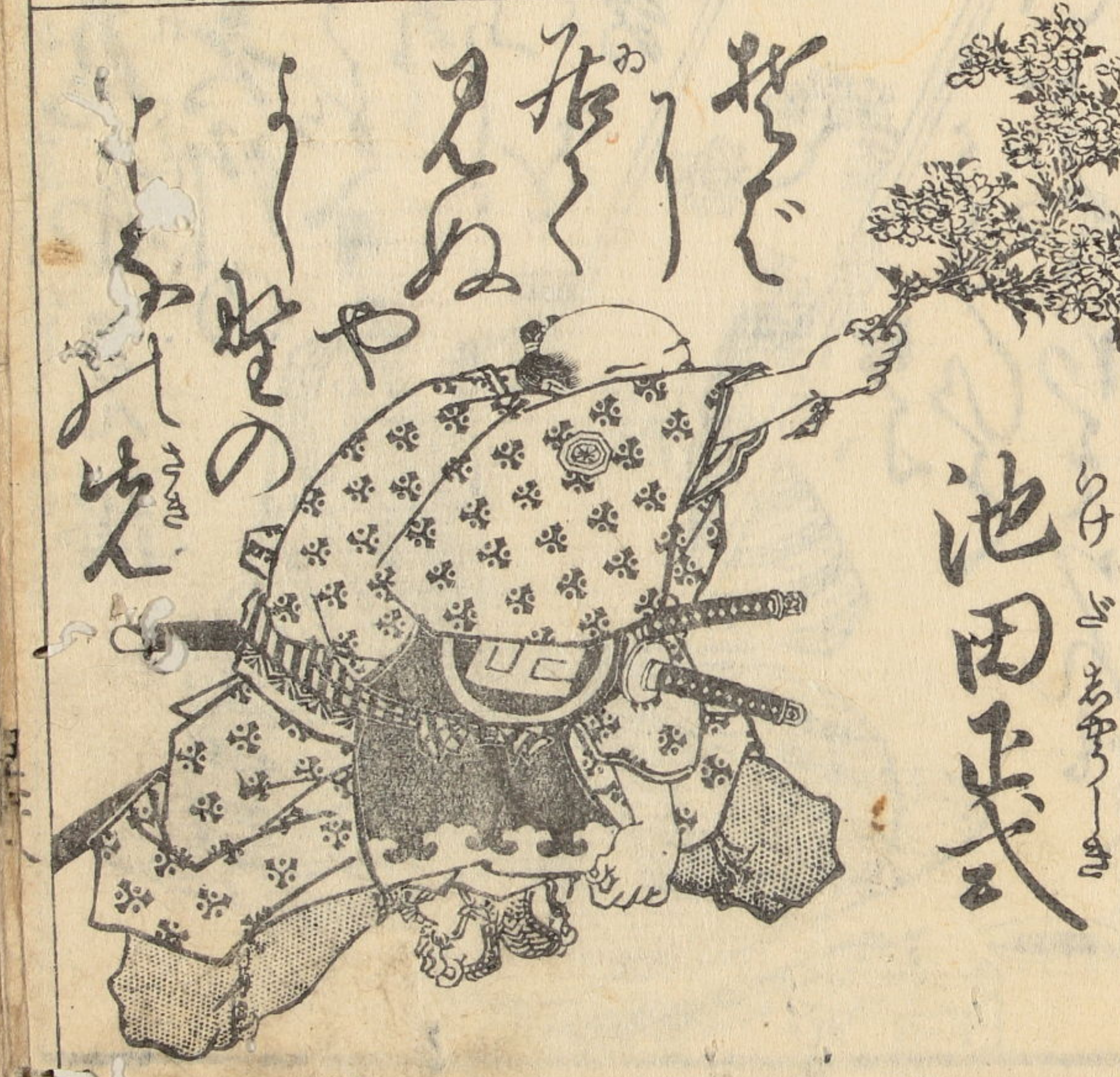
秋ハ

中江藤樹先生の通名与方ら
 と云江州高嶋郡小川村の人
 あり先生一代は弟子を教諭し
 陰徳を施すの活筆をかゝるに
 或時西近江を通行する旅人
 放店して此所まで集まると
 馬の鞍小財布とるるに忘れ
 故のせと云ふ所へ彼馬士金の
 財布と持来り中改ては取玉と渡し
 名が旅人あるの嬉しは此金と
 他と云ふと云ふも受むるのけり
 感心して宿の主人は是を活せし
 ちつと云ふ換彼の若樹先生を仰
 して毎夜を講釈もつけむるに
 老もあらずと云ふ此一事で先生乃
 敬するまの難有と云ふ一実小近江
 聖人といふも宜なり男子とありて
 阿れも字を以て世ふれれ子孫敏系
 昌るべしと云ふ



あちや
 のらや
 月
 まあや
 らら乃

池田正式（和州郡の藩士）の藩士なり非
 諧の貞徳の風をあら古今の達
 者なり其二句と出さ
 ○腸を断ぞよ花の衣（きぬ）
 ○庭（にわ）のすまのそめみ試（し）争（ま）ひ
 其身軽死（し）執（と）り心（こゝろ）よま（ま）る（る）邊
 小近（こぢ）き若野（わがの）の花（はな）ふ（ふ）られ（れ）と
 ち（ち）あ（あ）は（は）き（き）て（て）○そ（そ）は（は）ふ（ふ）居（い）て（て）居（い）る
 小の（この）と（と）の（の）う（う）と（と）吟（いん）た（た）ふ（ふ）の（の）
 一（い）つ（つ）殿（どの）の（の）由（ゆ）耳（みみ）ふ（ふ）入（い）花（はな）見（み）て（て）ま（ま）あ（あ）れ
 と（と）そ（そ）の（の）眼（まなこ）あ（あ）り（り）じ（じ）ふ（ふ）ほ（ほ）び（び）て（て）若（わ）野（の）山（の）
 あ（あ）か（か）と（と）お（お）り（り）ぶ（ぶ）ら（ら）ぬ（ぬ）ら（ら）乃（の）一（い）枝（えだ）
 折（お）取（と）て（て）大（だい）守（しゅ）へ（へ）玉（たま）産（う）み（み）た（た）ま（ま）ら（ら）り
 け（け）は（は）ふ（ふ）殿（どの）と（と）ら（ら）こ（こ）ひ（ひ）ひ（ひ）て（て）和（わ）歌（か）一（い）
 首（くび）と（と）揚（あ）り（り）け（け）や
 ○あ（あ）の（の）酒（さけ）の（の）若（わ）野（の）ま（ま）ぢ（ぢ）つ（つ）家（い）居（い）と
 こ（こ）ふ（ふ）べ（べ）き（き）な（な）り（り）と（と）る（る）べ（べ）と（と）ら
 の（の）風（かぜ）流（なが）の（の）主（しゅ）従（じゆ）と（と）な（な）ま（ま）る（る）こ（こ）



池田正式
 池田正式

尾形光琳の京都吳服所より
 天性画を好幼稚時より學ぶ
 事志きりしつゝ一風紙画
 出後世是を光琳風と唱ふ
 一説は光琳或夜月陰障子
 へ物のうつろを見て始て此画風紙
 吹と云つた又好んで一節切を
 吹と云ふのたけ竹の秋のそれら
 小よりて詠とあるを
 因云同時歌道を以て世に知
 られ後園の掬ひ光琳が姪を
 され彼が歌集梶の葉の指画
 の光琳が画と云ふとある

路通はつれの人をよをあらむ
 若かりし時放舟のあまの人も
 物を舟とるて近江玉島公龍山
 行舟し舟辺の茶店不付足
 小其傍よりうき非人か枕元
 小あは茶碗と見え世のつねれ
 品をうねい心不審してその云
 かけ風流の話あ及び小扇の一
 首の秋うつけ芭蕉おをせけり
 其書も又棧から下下かけけり
 ○老翁と云ふの則ち老翁は
 より翁の門人とするて名路
 通と改め難波に住ひけり
 ○山椒の辛く皮をさうせよか
 ○いひく人あはれて年の暮も
 其のむより



美市良兵衛八重水あつたの夜客と
 角力の最手とよまれ明石志賀之
 助と空の友也之彼ら京都の角力
 召る時ぞ後見と見え上道角力
 仁王仁太夫志賀之助土俵入時
 市良兵衛自今月你が二代の暗角力
 への原も你と殺し我も即坐死
 ると志賀之助莞尔と笑ひてさ會
 一が妙手とゆつ仁王小勝仁太夫
 の悪者とも志賀之助と殺さんと
 来と明石とよとよ江戸下りせ已
 無孺子の羽織小傘赤く目下用山
 明石志賀之助と大文字はぬき是
 名看し長き刀と母買木さす小
 熊谷公立とよとよ小冠り獨都と發
 けけいふ悪者ともは是れおそれ
 て手とりあくる

明石志賀之助の者 西の信濃と
 其に方けきえある仁王と太夫と
 つる者とおせおぬ斯くて土俵
 市良兵衛の者 白我仁
 太夫小あれとよとよ生て儀あるべ
 らと誓言とよとよ立むる仁王と
 たりは志賀之助とよとよおまひ
 つとよ上てあつたる見物の緒
 人手小汗とよとよ内明石早業の
 幸入るれ中史忽ちるる仁太夫
 羽と蹴て土俵の真中へらちれ
 是より志賀之助目下用山と
 名のことと申さされり○廿化
 津の吟ハ市良兵衛と同乃小
 那小のり時志賀山の花縁々
 ねる三井の晩鐘とよとよの



金蘭齋の老子莊子の道
 見ゆ世と物の教も
 人書さる米つる時断も
 あく是を代りて米を賣又門
 弟より衣服とから米幾度と
 あく是と主買も人云云世
 て背小口形を白く抜大字
 小金蘭齋と漆一服とさき
 歩行ぬ又或時門人を集め
 甫尺半往來へ代神樂のま
 観と共小提とてあつり杯生
 涯かる余念る所行る
 服部

称彦兵衛とい江戸小來の
 暫く武家方小奉公せしが後
 俳人となりて初名を治助と
 ひまより嵐雪と改む芭蕉の
 人数輩の内其角嵐雪と並
 る稱せらる其吟の
 ○元且をたて雀乃抱く
 ○蒲舟をたて移る次若山
 ○花より風かろく吹酒の泡
 ○梅一見一輪りとのあたる
 取つての草菊白ぎくの句
 生涯の吟を其角を嵐
 雪此吟ありてより後菊の句

金蘭齋
 老
 世
 老
 世
 老
 世



嵐雪
 老
 世
 老
 世
 老
 世



大来ハ俗稱向井五治郎と云
 團入るる京小登之哲自武家に
 仕、か後芭蕉の門入て能人となり
 其難髪と落柿舎去来と号し
 嵯峨の辺に住せ蕉門十哲の内上方
 筋の魁たる人其秀吟尤多し
 鉢扣来ぬ夜とるれ能るり
 ○よの山まさちる方小ををぐり
 ○おのの奥よりくき親のうほ
 ○湖のまきまきりけり五月雨
 ○時をあくや雲雀の十玉子
 ○木枯の地中もあこぬける
 凡一代の秀逸ハ一あむおる人
 螺子後宝晋痛其角と号芭
 蕉の門人ゆほろ中小宏才其執事
 角が上木のつる者あまうを性
 物かつる事は紀文ゆいざるれ
 ちやく廓ゆあをい蝶文山宗珉
 等とあはれ或日其角が家へ能
 諧の巻と持来る使あり其を見て
 是のあまりに拙点とるふあま
 ちの点料をさす玉れとふふのや
 是の見賃小するありとのひかりを真
 落半生かのむ人を知る
 ○東立や田とえめがれ此れや
 止る雨のの元禄六年六月
 廿八日舟自雲とる者と同
 船と隅田川に揚ぐの吟ん



櫻本其角
 日の
 と
 美



向井去来
 新架
 友
 友

井原西鶴の難波の人梅翁の
 月天坂成林の一人多住吉乃
 社を一日の二系二千句を吟を
 地より二萬堂と称せらる又
 戯作の妙を得て。小夜嵐。織
 宙。二代男。二代女。奴下めと
 夢て。置土産ふゆるまてあま
 たの昔者述あり。凡物の本。作
 業とまの事。此西鶴を
 元祖とせり又其吟も面白
 我々の松島もあはれかき
 長持。よまかかれゆ衣更
 大海日定る世のよあかる
 五十二才とてまかりぬを釋
 世

○三果せんものつ木の影
 ○ひつてのひつての捨るまのま
 ○花のて死むるの病うあ
 ○附もぬれて帷子ひらりこれ
 ○口もゆき首あけてるまか
 ○松の月枝小かかちるまぐし
 又女人形。傍おをそふの星を
 塾をぬれり。文ありの二百五
 ありまこと長ければふのせむ
 ○東山の秋の辞世あり

井原西鶴

鯛



えぬ里
 りの月

小西

来山

とら

とら

文



たをふく
立羽不角江古の人俳諧の不ト
いふ事又名と十翁と呼し其
門才千人といふ事あるもの名多
享保中法眼小任と此人未嘗
或日所出入の諸侯へまゐり
所門を入る内番の士たひわて
しつてても久しうありぬを
かひいけし不角とあむ
○そは換の袴り世なるん
そ所智毎衣かき事あり
とて立身の後四男辰角と久
るそ或方の養子とせし姑の
氣負ひかきとそは不角也
氣見して○煙くものや
吟せしる辰角其向ふ感と
再まると辰角足と王涯睦

曾呂利新た湯門の和泉國
大鳥郡の産るる後同國
小後り住て刀の鞘と造り家
此系とあま滑石音才一のれ
ゆて高貴の人ふ籠とせし
る事あふ方あふ時
曾呂利が門ふ落首し
粘あき者ありそ秋ふ
○柄のまもとばとととととと
君が心ふあひはらさや
曾呂利がと虫種々の活あ
まごも世の人よくある所な
あふりつて狂歌も多し詠
曾呂利狂歌とといふもの
今もあるはとといふ



たて
立羽不角
もぐ
は
茶やと
好む
さ



曾呂利新た湯
祇園
や
海
列

桃水和尚の號前國の人の住持と
肥前島原禪林寺の住持と
知れられぬを信する所此所彼
河尋求ゆふ都四奈河原
方かやあはさまる乞巧人の病
と必抱して居るに厄の洞
何ゆゑかたつ所ありたるを先
つれと脱捨足着衣とて深々
師ありてんといふ所ありて
あまなる所桃水の已足とて
彼宿る非人ありける傍に居る
非人とも見るとて只人ありて
俄あつたるをそれなり此所中
あり大けのちの住持單鞋つり
て往來の人ありてを爺がこと
よびて買入ありてとてのせま
の款に我小家より大けの住持

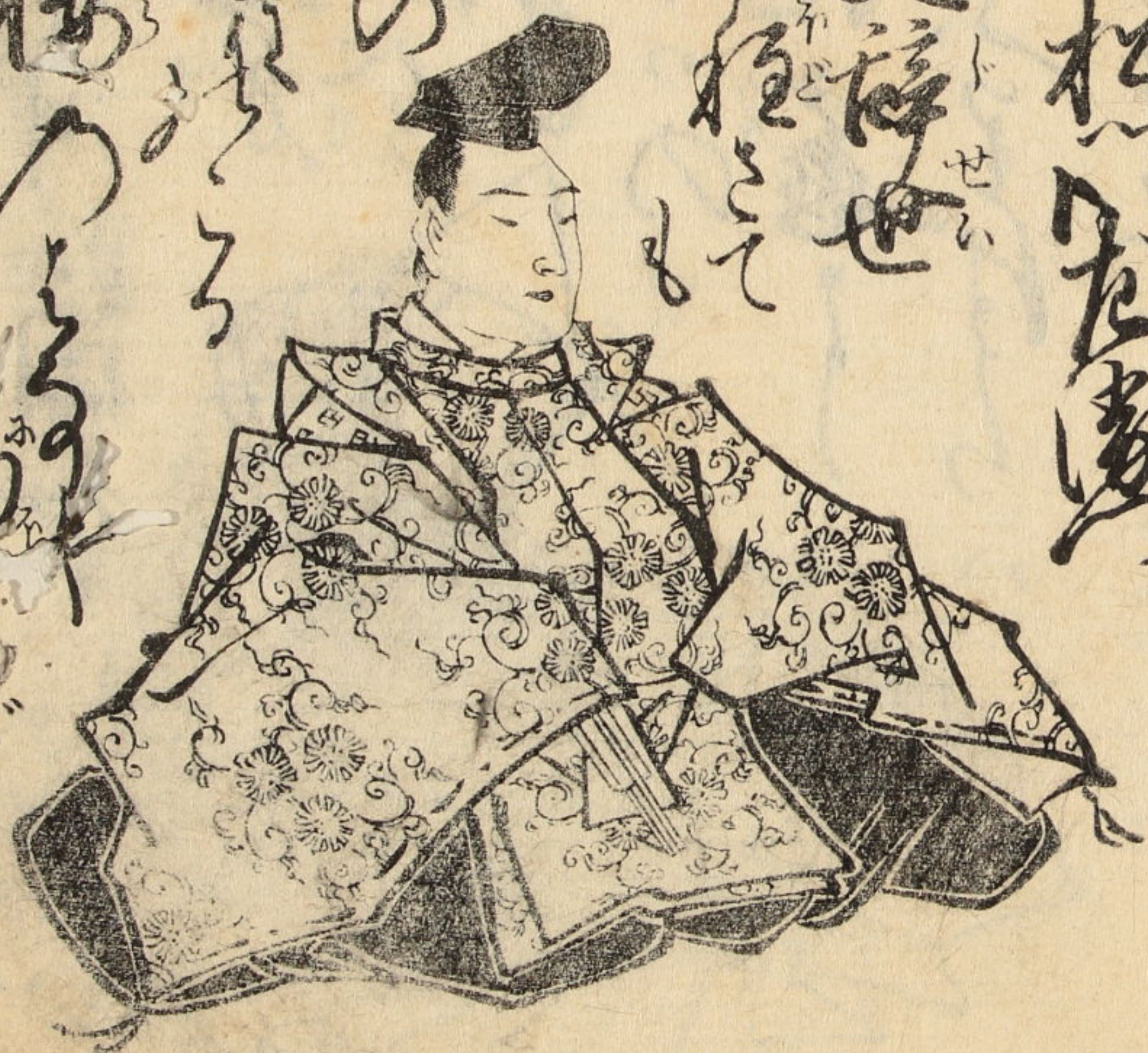
近松門左衛門信盛の本姓松
養氏にて伊豫國松山の産平安
堂又巢林子の号あり若くは
時志とて京家仕下り故也
て肥前唐津の近松寺に入り
志をく禪法と修し又一妻を
てふふ登り都万大夫の座の
歌舞妓狂言作り毎度新
奇妙案と出せる夫より大坂
竹本筑後が標坐の浄瑠
里とて文作たり趣向意外
みづれに緒人たりと感心され
近松が新浄瑠理とたふ
は其其居究めて大入る
とを生流に二百余曲の院
本を流る是れを碩才九
さると加へ時于其年七十二
才のそれ辞世の一首とて終る

桃水和尚



杖と
花と
ほ生れ
何所
の

近松門左衛門



それ
史辞世
とて
その
ほ
梅

曾契沖の空心と古谷姓の下
 川氏中代武主の阿智梨
 攝津國に生るるの
 母百人一首と教あるた一遍
 てそのはれは雨親共ふあ
 取れらるる後りや物と速
 詩憶せむとあふは十才
 出家高野山に登て密法
 とまらむの山も立てて
 こ修行せられけり
 九才の村和泉玉久井の里に
 せ師の詠るるとをきて此師
 佛道の詠るるとをきて此師
 正心源の普皇國の往古考
 正奉の世の人の知るると
 終の帝中ふつうがけれ

肖柏法師の具平親王の
 和歌連の道の宗統の道統
 といけ死自牡丹花と称さ
 うけたまつて連歌新式と
 て其法とをむむむむむむ
 御會十五夜より出て
 の空はあきそやえ夜や幾世
 とやけり
 ○まゝさうぬのふやあ
 又○そのふ知るやの吟
 とき時雨ををい句え此
 吟ふとく忽豊雨降りと
 既其角より前肖柏が
 わるふとこれい者も巻の
 四季の意直目暮小これ
 あら酒を好ま香とを行年
 八十五才りて泉州南郡

契沖阿智梨

孝子

今

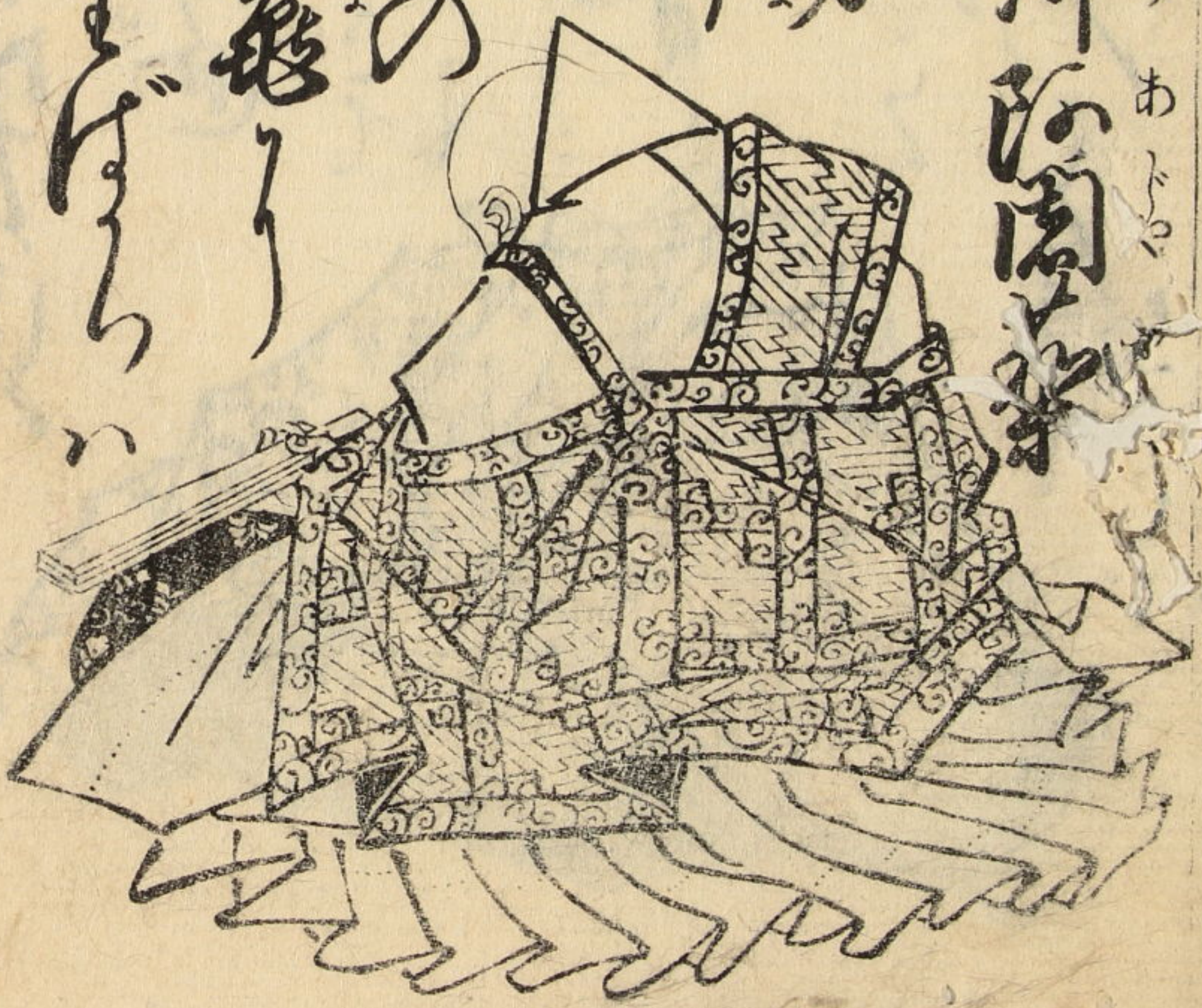
字

の

海

久

そら



牡丹花

肖柏



そら

あめ

あめ

の

枯



手車の公羽の何れの人か小車
 去る幸保のたぐめ都の町を
 小車とておぼしめしあるまじ
 あり此の童のこれが童もつぎ歩
 行みはたふいと公羽これ誰れ
 せ童もよこれのあれがの
 へそりて糸のこころとあるま
 しが或時さる家の軒下の端
 座してそ優死も傍ら小車
 車都波と速おれぬ小車
 の歌のよの車都波女おつけ
 て中にもありのりある人の世
 習ひてかをけんとその比都鄙

藤原藤徳元ハ美濃の人なり
 初織田某はへが主の家断
 級の後刺髪して院亭徳元
 と名を改め江戸馬喰町小車
 て和歌の指南とて流るる京に
 會て貞徳翁の門人とて修飾
 諸を修行して一家流を成り
 ○去つてその吟ハ松井重頼が
 狗子集とてある時秀逸なる
 して巻頭ありき一勾あり此
 他世よきことえり吟ハ
 ○初とてその聖やまを物に色
 ○大和ともよきとての駒あり
 若狭園とて終るそ辞世
 ○のまての生いこと月夜が

歌謡

手車の
 小車の
 小車
 速
 車都波



藤徳元
 美濃
 江戸
 馬喰町



石田又た幾つ江戶西替町不
 住一人あり故あて哲相別
 小田原へ移り程あく江戶不
 帰薩摩野をく名と未得と
 夕先史狂歌とめて世未知
 ら其後の人ト養未得と並
 へ称せしと後貞徳の門小
 入て号強乾堂とす
 ○系子や乃のこそむらつるま
 あ己の○能くあての句杯俳
 諧も又妙ありそ子良堂未
 琢がふ
 ○河をたむらひ亭や登形が
 此人の又在教とくしそ門人
 ありしと

又京へのゆく人の別れよある
 ○いろはよてかきよめしはるる
 独るもせむ多への住ま
 ○名中あふの秋の東叡山小
 て風の咲るをえて縁し
 あり



半井一孝

名ふ

山を

わら

の

花

花やちん



石田未得

お

お

お

お

お

炭

又平ハ越前ノ生並御テ荒
木氏の人らるガ後母ノ氏
と唱テ湯淺又平と云リ近
江至大津の驛一幸久しく
住テ戯画をかきて鬻鬻小内
の人浮世又平ガ大津画と
云テ登下りの土産お求め
と云モ甚芭蕉翁の句小
○大津画の茶ね下り名御佛
か詠一と云り甘井の佛画と
云ふかき一と云り○目もえぬ
の秋ある人鬼の念仏の画續
と云り時秋の秋るると云又或説
小湯淺又平湯と浮世又平
と云同名モ異人とも云

左甚五郎ハ伊丹氏の人也播
磨国明石お生る其母常世に
名とあぐへ死一子とまけ玉の里と
麻子耶山の本首守と祈り幸年
久しく四十八才の初て好身は
甚五郎と云む成人小随て彫工
小妙を得然も其性急欲やく
たらくつたされハ業と云る身ハ
極く急なり或時隣の主れを
諫し小甚五郎さらしてつたの
の句と吟せと云後山城園伏
見の里小後り任寛永十一年四
月廿八日卒四十一才なり其子左
宗心と云い三代目ハ左政勝と号
京今出川寺町小任公子二世
共此道の名譽言かり

浮世又平



目もえぬ
心のぬ
角もえぬ
鬼の影も
あつても
ねたて
あつても

た甚五郎



きりふ
まげ
梅の

祖来先生以茂卿俗唱
 获生物、江湾門と云、山藏不
 生れ上徳園は成人其父の醫
 生に業とあり、先生幼少に
 學に心を用ゐる人をあはれむ志
 といふ、若年小くして大儒の
 門に方る、江湾小来りて、
 其元場町に住其全口其角が
 隣中であり、とてされ、其角
 が句すも
 ○梅が香やさきもの秋はあぢを
 とつる吟あり人を教道なり
 或日講釋の席中て○世の
 中どの秋の泳れあり

丸山權太左衛門の陸奥仙臺
 より出角力なり身の丈六尺五
 寸重さ四十二貫目其手形八
 寸余ありとぞとを難波の角力
 小登り、天満川崎る吉田氏
 丸山を招きて力量を試し、小
 笠小あまき竹の園の内におり
 一とどりて是と捨たり、主人大に不
 かり死て、其希有の大力なり、此
 林利家の私器とあるを、と捨
 たる所の上下と切之花入と曰、丸山自
 と銘して今、所藏を力士小似
 は、かく風流のなほ好きて吟わ
 句のあまき竹の此のひとちの吟
 小入たり肥前長崎の角八小下り
 彼地を没るぬ

祖来物茂卿

世の中

はるし

く

い

あ

の

ん

ん

ん

ん

ん

丸山

權太左衛門



大石内藏助良雄の其排号「永鷲」と
 公播列の一「其某侯の元立」より主
 室「大妻あり後都の片切り」山科不
 閑居る此主人主君の難言をひん心と
 千々一碎てつひ本望をこぼる世の
 知る所ゆて事新くゆへる滑石昔
 洒落も他小あえて今も世小唄不雪と
 頌せる上方哥ハ此人の作るとを詩歌
 酒の世と公のる一「上さる画を
 するの」の表のゆれ秋ハ時鳥の画
 讚小詠「のり」或去浪との後固
 扇小罪罪と画なるの久後の秋を
 ○酒の江のありは真のひん心と
 あつらひの世のこころをひん心と
 斯詠「とる」説あり色ハ耽耽酒
 小狂下敵ハ油断せざる身のゆへ
 さる秋よとのゆへに小疑心と起さ
 せや内蔵助ハさる愚昧ゆてハ

天野屋理兵衛ハ難波内平野町在住
 一米の問九と諸家の藏本とのあり
 との業とる性廣直ゆてそと
 て深く曾尼雅の道も疎く梅翁
 宗因ハ晩年の門人ゆて俳諧もよく
 せり播及赤穂の城主某侯の恩と
 感づく其家臣ホカ難言討の共
 小勞ゆてす此事ハ依て難波
 と大及谷「正山」村ハ退隠してそ
 とを「松永」士と号し近辺の貧者
 と見れ財と施して是と救ひ我菴
 のまると小川「橋」とて往来人の助
 とる此他種々の善根とて念佛
 三昧の信者とありて享保十二年
 正月廿七日大往生とす其同姓
 今も猶「京江」の両地の連綿たるハ
 偏小理兵衛ハ積善の徳受る者



大石良雄

東のりま

つきの

可

山

つ

端

天野屋利之助

らんと

と

男

強仕

強仕

強仕

強仕



小野寺秀和十内と云ふ赤穂の浪人あり雄と共小僧言を討し義士より其妻と舟子といひ夫婦ひらく風流の心と云ふ本望を達せんと為東へ下る時途中より妻が許へ送り文の内おのつけい飲ふ

○この世も又あつたといふたへおせまう死出の山も○よりくおれよかゝる様人ののまゝのれあん身のゆえ又妻が方も返事に来り文の内○茶はあつたお涙の雨おとといふきききこの世もあつたつきれぬの飲の夜討の時姓名とあるお豆人の書長りの母

子葉の俗林大高源五右と云ふ小野寺が同甘藩是又義士一人を十内が姉の源五右母あり茶吉又小達一俳諧水間沾徳が門人として然も上手あり

○日小やそといふいふれ山様○初らしは古は茂子の四葉の汗○程又小は秋大名やの談合○山を列敷といふ句の春初と云ふ連の彼地と引あつた其小院の門前あり酒賣家小甜い吟トなる句ありと云

ト、作

小野寺秀和



あつたといふたへおせまう死出の山も○よりくおれよかゝる様人ののまゝのれあん身のゆえ又妻が方も返事に来り文の内○茶はあつたお涙の雨おとといふきききこの世もあつたつきれぬの飲の夜討の時姓名とあるお豆人の書長りの母

おのつけい
飲ふ



か
おのつけい
飲ふ

一蝶の夢賀氏の人を俗稱と信若
 濱門より後訓髪して朝湖と
 野安信小なる非詰の芭蕉
 公羽の門弟書右左玄龍と師
 とせり友人あや中おもりの
 其角と云ふ交ふかりと或日
 其角と云ふ芭蕉の菴よ
 もれきかへ途中中ては極掛のむ
 うよりあふる不行あひて
 ○たがかけれあふかけてくえ
 其角よりあふ
 ○分とらその目と思切る世
 一蝶其角の極の讚とそいふも
 といへん又端歌の文作上る
 也○あふま舟○あつらふを今
 もあふれり○あつらふの歌い七

紀伊国屋文左濱門江戸本八町堀
 小住家業の材木の同屋を誹諧
 其角の門人を千山と云ふ街芝
 居小松ひてあふの黄金と云ふ故
 人紀文大盡と号て名高
 己世節分の夜揚屋町和
 泉を半田郎と云ふ揚屋を許小
 て外小粒金と云ふ時あ
 へといつて後あ家衰て深川
 ○三徳の勺いその女ぐえんむ菊
 のちりといふ集小入吟る因小
 日紀文が実子と文左と云ふ誹諧
 地留町小住美男葛と云ふ相と
 御でつらふ世と云ふ誹諧を好
 と亀山と号し後法孫と云ふ明
 西と云ふ女永四年六十餘才也
 紀文が後あふ綴る

英一蝶
 浮るる
 の
 りらも
 存れらるる雲の光



紀千山
 之後の
 乃夷久



宗眠 横谷氏友常と云俗稱の
 治兵衛と云此人の彫一輪牡丹の
 貫天下品の名物又武侯も小
 柄具彫上と云物多の手に金玉の
 一と云余の行ゆが上と云り
 其事兼の何某の事と云催促書
 立腹と彫るるるるるるるる
 よるるる法小おびふ此の早速彫
 中見今午金下一玉れと云うけて
 兼て我友と云る一蝶其角文山を
 伴て天満舟小らもの隅田川小棹さ
 きたる終日と云暮おふは真崎の
 渡初時ものおとつと云とあれ重
 よと蝶小渡一舟小乗合一人物
 空小時名のふさまと重おぬ下画
 此と即坐小彫て奉り小彼君稱
 此のあまのさの出物玉のりり

佐々木文山 黒弁化堂と云一助
 と云江戸西の窪に住志風流
 兄玄龍と共小書とて名高性
 酒と好と酔て茶とあるがと云ら
 見奉る其角の玄龍小書と云る
 ぶとい文山の酒の友のれがもり文
 深く日記文其角文山と云るあつ
 れと彫るあを揚屋の主人春の山小
 様と画る屏風と云と文山小賛と
 と云るあを筆と際て此所小便無
 用と云これ主人不與おえなるを其
 角下の花の山と云五文字と云けり
 此所小便無用花の山
 俳諧の一句と云るり主人を
 るるるる其れ童の口小此所
 小便無用佐文山と云はれらるる



中余宣伊勢の人京登り住
 諸君不達一とら香道妙妙
 性物不から酒と春て昼夜
 金と見れ人の物とをさつと
 拾己金あれ石屋の上人もとされ
 同流小志厚く花紅葉を
 方るる夜清瀧川小舟を
 葉と吹まきび一夜更ふあふ
 其音色はさうの面白けれ
 の夜と重ねる四日余つひ寒
 氣小犯され是とるに悔ひけ
 老もく勸進帳をそと奥小
 ○みりのさやを食とあるり
 車と来て是のの知己の家々を
 廻りて金子若干と集め通駕
 終更吉野へえふとて
 ○何やらおの秋の辞世あり

深見十左衛門貞國の宣文の
 江戸小男達とる者ありあり
 其徒の長る強さを死弱きを
 たす人の難に見てさふ事と
 さ曾て俳諧とた難波の梅
 翁宗因江戸下り門人とも
 して其吟あり我額の抜あり
 てありしを奥とて
 ○及月やまて下り此額
 後新松とて菩提所の内
 菴とあると名と自休と改此
 野小住けり○世とまの秋の
 時とまらる因ふ助六の狂言
 小影の意休とる者自
 休をかこりるを



曾翁の肥前入柴山氏月
 海と号は早年と薙髪は禪
 法と寄依を幸深く諸國を修
 行入悟とありてそれら僧俗
 のありふあをい都お出て春の花
 ふよりある地放の紅葉の詠よ
 き所を見立自茶道具と
 荷ひ来りて席とまうけく客と
 待風流の輩はうらまえてそい
 つふはれはく程もあく賣茶の
 名世ふまのあそ茶をうる席の
 建たるれの文か
 ○茶後の黄金百鎰より半
 文までふれ次第たるのとも勝
 たよりのまけやふま
 大酒の賣茶翁の下のり
 折々の究末がふふ壺ひの酒買
 小行し奉のありとる後の家
 茶の茶の茶の茶の茶の茶の茶
 時米と送の杯とて是助し奉
 もありけり或時屏風書謝礼
 て大なる酒樽ひとらりて近切
 男女あつて是のまきて我の
 共小踊りる酒と共ありて傘
 両様の下ありと見出能相得
 ひとと人ふふありて下る生涯
 少のふくまるとまの正月の吟る
 年ふふ歳且は其内の一句より

歌集

心月年酒
 飛田新樂
 新茶花
 波江の
 光れ酒
 先れ酒
 酒
 酒




因十良の江戸の産人にて總
 國佐倉の源氏とて一藏とて者之
 江戸未だ和泉町に佳幡隨院長
 とて唐犬十右衛門とて男達
 と友とせり空十良生れて七夜
 なる早右衛門とて名と海老丸
 とつて方十四才也能優とて
 切名段十良後空十良と改む
 能藩と好む才磨か門人老能
 号才牛と呼和泉大夫浄雲
 金平人形のたてを流
 事といふ工夫木挽町山村坐
 老歌萬歳曾我了五良
 時宗の役中初て是と勤と
 代流事とて家の藝とせり
 當時八代連綿言ハ実能優
 中の名家とも称す

水木辰之助元禄の諸人
 譽られ歌舞妓の女形あり
 元禄四年京四条より始て江戸
 小下り市村竹之丞坐更後
 備猫の所作を勤め江
 戸中あそびて賞美此狂言
 と見がもせむとせしを其
 角辰之助おろし吟小
 ○まきとまき緒人のまねを
 されもやくそ流行り多し思
 ふ一又七変化の所作とて
 角辰之助よりたてまね
 ○梯歩の歌ハ辰之助を具
 負せる富家と共小隅田
 川のおそび時の縁あり

歌仙

市川
才牛



山本辰之助



閑屋

傳の平林氏京の人安樂
庵と云地妙と得
今安樂菴列衣と名づる
物此策傳より起る所
俳諧とた狂歌もよ
け兼ての落話の上手
身七十の年醒睡を題
く矢野の書、冊を
猶世つら
○本がこれの句の干菜寺
の涅槃會小ちうで時の
吟とを時代の寛永を盛
んふ辱一人あり

露の五良兵衛の京都
住て祇園真首を原又
北野千本松其外洛中の
祭禮用帳の場ふふ出
辻終美を統あるの落話
等とる者あり是今の辻
の組といへ其の
老若首儀露かをる
さくんとあひたつてい
日びせり笑語と書つり
五冊とあり露かをる
題せり秋の夜の歌
地本の奥の詠あり

安樂菴策傳



本
か
ん
げ
ん
の
や
あ
ら
ま
り
る



秋の夜
あ
ら
ま
り
る

〇人老れぬ身はまろまればかたのづゝ
 わと心ともあはれかたれぬあやと
 〇のたれも世ふり果一老の身は
 際れまむ死んたののこを
 〇あられももの秋の今も真乳
 山聖天の境内に其碑あり
 歌道古学とこそある者此
 人とて近世の魁とせり

重頼の俗称大文字屋治右衛門
 帳名に維舟といふ真徳小舟を
 する此人生得跋扈是れ同門
 の人と後交さる事敷多る難
 屋立浦池田正式皆不和とす
 されども非潜の名譽あり
 〇秋の持たるるもの
 〇秋や久し下はゆかぬはらばら
 又貞室已母の追慕
 〇さかしの其のれれ佛の座
 とのふをこそ守りしは遠敷残りけれ
 ば足よりして貞室とこそ本懐と
 るも後彼人の自界の低きを重れ
 〇あはれに日まけとてやまひは
 かにさるるもの大文字
 〇あはれに日まけとてやまひは
 かにさるるもの大文字

戸田後睦
 夕城
 人
 夕城
 人

料理
 杉井重頼
 杉井重頼

歌仙

隠岐我兵衛の正保二年十月十四日
 原六門通のありし時の将軍屋敷
 生得武藝を好み力衆の勝れ
 宮本武蔵の門人より剣法も其秘
 と極む俠客の心あり人の難を
 れ必まゝ正保二年十月十四日
 尾張町より出火と其火吉原へ
 移る此節の市中皆昔昔耳と云
 へる此火と消す具の事なり
 義士湯家根不登り及びその
 茅と切落し花もの如く働
 つふ火と防ぎ止る時の官吏違
 脱と見取て其働の賞美の
 余の火漬りて遠名酒一樽甲一
 番とたまらぬ都下有以貞徳
 惟然坊の美濃人色甚蕉の門
 人老俳諧の上手元の家も富が
 後甚を負くも所定はるる
 歩行師の吟や句と念佛あり
 を風ひ舞と抑て拍子なる其
 の人風雅念仏と夕の則芭蕉
 の長と風雅流とのありはるる
 下世不有る危張るる
 室の嫁せむ武日侍女下を連
 途中老父行むぬ女をそれるる
 も多じの父上りのつらむせしと
 純正ともいふ言流の御い取つた
 歌一く巳由お涙ぐまそ
 ○もそそい唯るふとくあられが
 とのいよそくを予さりとるん
 ○美山のよふいしこく小まふか
 ○梅の影あるの影あつたの
 平風狂かのごとく

隠岐の
 我兵衛
 の
 正保
 二年
 十月
 十四
 日



推然坊
 ひる
 小
 小
 小



歌仙

三十一

鯛屋貞柳の難波離屋町
住菓子と離れ家業として
永田山城大掾との兼ての禁
裏へ南都墨と奉る故其
号と油煙斎とも呼ぶ狂歌を
以て一時名を
○我侘の沖堂の菓子と
油煙斎と人々のあり
其のいと其の沖堂前
あはるる一年の菓子と
○この西の菓子と
梅とやらん柳とやらん
○月をその歌の時時
まて時あたるる

○中言水の京の産え極の
以能諸知りて其名世高
○本が上の句と吟ぐより
人風の言水と称と
○尼寺よ惟業は苑のちる徑
○子規さうの拙みさうれり
○文持て赤つたりの葉の舟
○大吹ておふ人あつたのち
○火のがけや人あきだ経代
享保七年九月七十二才
終る其碑小風の句を彫る
京寺町哲願寺あり

鯛屋貞柳
月をその歌の時時
すもの
これ
いやら
ゆえん
か
徳



法
支
わ
山



地黄坊揚次江戶大塚の人俗
 稱の茨木春朝と呼ぶ醫師
 古今希有の大酒を其友又門
 人も甚好くもてを慶安の以
 江戸小酒戦と云事専流行
 其其候此揚次と夫蛇丸底
 深と云る人を東西の大將と定て
 門人連両方ふたつ酒と香を
 あて用肩と定り多揚次其
 席の作法をもとて記せ書を
 著りて水鳥記と名け今も世
 中これの有りてはかうと云る
 詠の辞世を則石碑彫り飲之

大蛇丸底深地黃坊揚次と
 同時の人を武州大師川原の
 富る農人は又大酒中を
 弟あつてありて揚次と共酒
 戦東西の大將を其家と今
 猶子孫殺糸目とて彼所あり
 酒戦の以用ひ大不血も以今
 家小と云ひ盆中の時画と
 龍と蜂をかきたり則さる
 の心と云ふ心ありとを
 ○かけ取の向ら或年大
 晦日の吟とのや

次非

地黄坊揚次
 南は
 二宮
 あつての
 揚次
 河



揚次
 揚次
 揚次

大蛇丸底深
 然と
 破
 手
 惜



十寸見河東の俗稱河部屋藤
 右衛門と云河東河藤の文字
 書かす名も本姓伊藤氏
 十寸見堂と号し江戸品川
 の豪家酒とたれと授藝
 長半太夫梁雲の門下にて
 浄瑠璃節とするべし河東
 節の一派と云は後門人丈
 を養ひて河東二代の名とほ
 しむ其流き今たえ江戸
 音曲の名物とあまり
 引おせの吟の袖かこと
 浄瑠璃本の奥載るもの

近江へ元此柏屋近江と云
 る鼓の筒打あを自云夫
 ありて三味線の洞のう
 ひとの鋭目をり奉を仕出
 其音絶妙て類を冠
 物あ是が打三味線他
 小異るりて楽器小合母能
 あへりとぞ又三弦とて八色
 立音をころりてありとて是を
 八景小よりあての世の中を
 くる歌へ縁り其作り
 三景線へ今もつたるて世の
 人甚珍重せり



歌仙

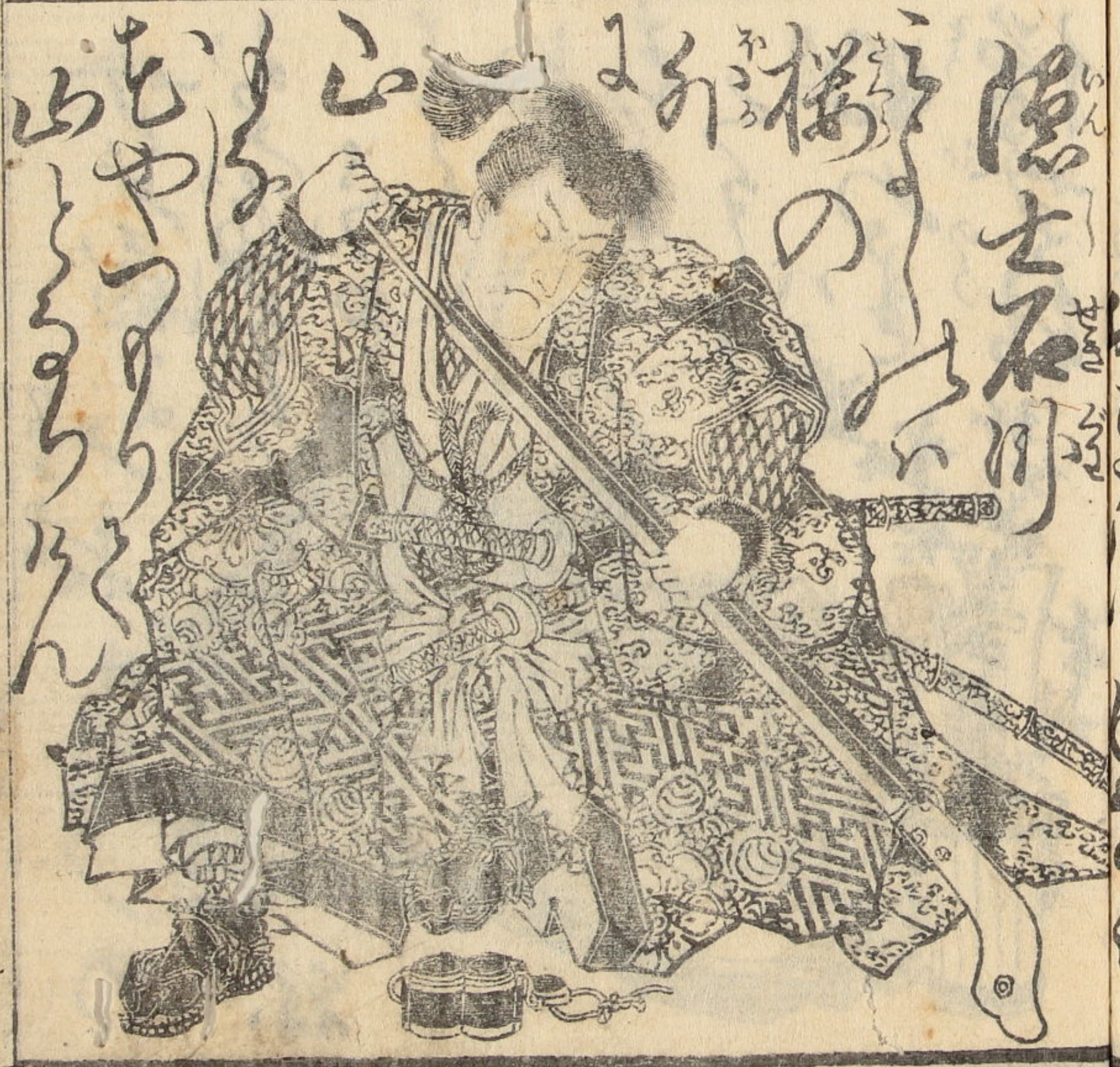
地藏坊正元江戸深川住
修行の僧より深き様子あり
と若くして出家とる御府
内の出口金像の地藏六躰と
建立せんと大願と起し嚴寒
極暑との共かゝる奉り市中
と托鉢は丹誠積り二十年
とくく出来ぬ今江戸の大地
藏と唱ゆる物是るり○さ
夜の歌は或夜我菴賊入て家
内小ありゆ抱されぬまき
衾いとろとのにをきふ正え
此のさまどてらちとらつ斯

石川其先長野求馬を信州
の城主某侯の長臣かゝて軍法
の極秘と得劍林の蓋奥と極
め千能六執に至る所も又神
道家不立のて國乃と向あり
禅教小くして深く學ぶ和歌俳
諧ももうとかりと後故ありて
願と辞隱道とく左右軒石
と号身と雲氷小ありて所
まうこれあるまぬとせ都小住
庭小一株の樹ありとをそ
○一本ことこのかゝれ候つく
山のなまより心ち家との
○みよりの秋は彼野の辺を山
めぐりせ附小嶽ののこぞ



地蔵坊正元

とくく出来ぬ今江戸の大地
藏と唱ゆる物是るり○さ
夜の歌は或夜我菴賊入て家
内小ありゆ抱されぬまき
衾いとろとのにをきふ正え
此のさまどてらちとらつ斯



徳士石川

とくく出来ぬ今江戸の大地
藏と唱ゆる物是るり○さ
夜の歌は或夜我菴賊入て家
内小ありゆ抱されぬまき
衾いとろとのにをきふ正え
此のさまどてらちとらつ斯

無能和尚陸奥の人浄土宗の天
 智識者其徳あびてかたじけなく行ひ
 へて愛のえ若かりし時諸國行脚し
 て或家にお宿る其家の女和尚親
 かちのし藤原不迷ひ夜更人あま
 ぞも床回忍び行い無能の夜も
 がし藤原を扇風たてあびて微音
 ぞ念佛して居あひけりされとも思
 ひたたくて背の方より抱はつふ
 けり小敷馬く氣色もゆる自若と
 きて称名と唱ふ女何とも詮方る
 く志ほくとして行い立朝狂れ
 くと巳と其恥と演る故和尚は
 忍びて十念を授けて是と平念せ
 させけりとする彼女は是より生涯夫
 女のぞ念佛三昧あてとてとて

活井白室成へ聆る坊も云江戸の人
 梅翁の凡とをい俳諧の上手なり
 身の丈人小まをれそ様まきまけり
 見六天物坊と異名を酒と時酒
 一日もとも酔ふとて或時酒
 来ふ乗りし剣術の道場へ上る
 ののと面白く我も師と試合と見
 形のたぐひも人々恐先もあはれ
 しく立合甘く白室 忽ちをまれ
 ぞ俵竹刀を投半々
 ○夕まふうされて肥る田面のね
 みるぞつとをりひけり孔子の讚不
 ○豊年とあれとかいひのまはく
 釈迦の讚不
 ○蓮の美はえんが釈父が
 本家とてあるわが



哥仙

四七

長流の若かりし河内彦六具
 平と名乗大和國宇田の郷久
 津の國難波の公なるを
 静小書と續秋と縁秋と
 集伊勢物語なるの暗記を
 富家より弟子とて生傳世
 縮る人之心の慈せぬ時久味
 桂川心よかめひとえごと
 〇わたりらるる板井の桂
 〇桂川心よかめひとえごと

鬼貫の攝州伊丹の人と俗称上
 鳥惣兵衛と云針撥西と業と
 難波小舟を能治の松江重頼が
 門人として元禄享保の間小西美山
 と並で其名四方ふとて或人
 〇庭前へ日向く暖る摸の菊
 又無のあゝ瓜
 〇油さあぢうさうく藤取歌
 〇わらわりの秋のそらるる山
 〇行水の持所なり虫のあゝ
 〇おとせやあゝ面自れり花
 〇一年批前敷賀うそ芭蕉乃
 〇あゝ物と知れがさし林の
 〇先年の後へ羅々哩居士即前
 〇ものよひけ



半谷の通の内の内とのの云て
 行一老女も或日之茶通室町の
 街と服紗の包に黄金とひら
 今傍の商家に持た其由告て
 今中も尋味する人あり歸り玉られ
 とれ中事敏系けれ初るまると
 をき誠るの心之落せし人のれい
 をあふと理をせめて是とあ
 けいへのけり程も其主たる来
 了て此由をき大方もいふこと
 金両米取を彼女來るる返は
 与てたとれと見たり其後電乃
 多り時あるの由もは金と米を
 えとまふ電のふたもと金と
 るほとるふの拾ひものか下
 とらんとて〇抱ひぬのふい
 後とてとてとてとてとてとて



半谷の通
 物ぬ
 夕納涼



非人ハ助
 かんき

赤塚籠袋の通古孫兵衛重治と
 公難波の人より相見する事ふゆと
 得て常門人来る時其元ハ明日
 花見に行きん或今晚遊所至
 る心あるえ探ふといふしてたふ津
 ろ又人告て曰己ハ孤相と生涯
 身いちして貧しく暮れ相るりと
 一手新治郎とあると他養子あり
 己見獲身とるの食ある時ハ食
 食する時ハ不食とせ世と過
 或時知己ハ人若別れと告て自我
 ハ餓死の相あり徒ハ生て人の施
 うるハ天ハ逆とえと夏より後ハ戸
 ハ出入を止めて数日食と絶終ハ
 世と太りハ小田かじの秋ハ世あり
 と縁をのめあり

九祖川柳ハ柄井氏ハ人浅草新堀
 端住其先西山宗因ハ句調と意
 非濬談林ハ再興せん志あり中ハ
 変して自己の風を立狂句と吟ト
 世ハ行る事大方るハ緒方より
 評ハこハ本内或時持あり縁草ハ
 〇天人ハ小田原町をのゝて居
 とつハハ川柳此句の意と解ハ
 りを思ハハえけり其婦も共ハ心
 するハ或日ハ返りて浅草寺の觀
 世音ハ泰清草ハ本堂の合天井ハ
 画ハ天人有とれ下ハ小田原町より
 奉納セハ灯燈と観ハてとえと
 告彼妻ハの意と解ハ夫ハ小田と
 告けハハ川柳横ハと打て此句
 とと長と傳ハ

赤塚籠袋
 小田川柳



朽ぬら
 多や
 しん
 ろく

柄井川柳
 神楽の
 女



とわ

似雲法師の安曇園廣嶋の人生
 得秋と好山勝地此所彼野
 あま住所ふさぎある後世の人異
 名と今西行といふ已も斯とき
 ○西行の歌の跡一あり従来
 彼上人の遺跡と墓心あり
 けれどれが墳墓河内國弘川寺
 不有とき已の其所弘西行が
 塚の跡さやうる菴とむまびて
 ○並あつぬむじの人あつた
 弘川寺ありまむむのそ
 又須磨浦あり時たえ
 久き滝電と再興と
 のたえさありのほの煙まゝり
 昔よりかまむあはかまのくら
 介余才と和泉園尾栗と見
 ○乃もま恒根のさつこひ
 まむむむの乃あつたあけの
 とあつたよ其菴の名と霜踏鳥
 菴も人かむとや又或時人
 のの庭の栗とあつて
 ○つこのは流るるもつて
 むれひひるのさつこひ
 又八月十五秋の雨とらとて
 ○つやあひ秋の暮平本あは山
 月のかつらも雲よまほ
 ○つこの歌の年内ま春とあ
 るあ家集の巻の巻の巻の



似雲法師
 ありまは
 年々
 室月長者
 年々
 ありまは
 ありまは

水鏡金吾の阿波國小鳴戸の人名若
 也より世を道るれ心深き京
 家仕へて其妻と海に四十近き
 以仕を辞して故郷のりる膝を
 りておろし其菴より其養老の松を
 以て御家の飢よみの米の炊かひか
 かねれども佛名を唱へ奉り所作
 とあり月日と樂しむたまき徳信
 の城下にいられ知もあも良も良も
 まいとは好る酒とよむ老てを
 健る人あて七十三才の時大和國
 大峯の登山よりかふ年齡あて山
 下若古來より例あり別當
 所の記録不載と老八十才也
 没き○さのあめの歌の病中の題

八助の播磨國赤穂在の豊元末末
 石氏の僕より彼侯大變の後大石邦登
 る旅支那の向城小止宿を八助此野
 来りて老の命のりる念記玉のれと
 義雄よりきて荷造りて座右の物は
 されとんと金ひと包にたれ八助投下
 て立腹はかるおんよそ来る已むわら
 んと流しと涙をぬき雄これおまを
 してとてまよりる途編笠かひり土の後も奴
 僕供へて堤の上を行つた運死て八助
 上是開ちてし已若し東都都勤
 ののまらるる俱く吉原通一さるる
 こゝろ念記とさういふせかれは
 納め公より大石東丸く後三面思乃
 同月同日病て没しぬ実深き主従の
 縁とあり○さのあめの末期の吟



水鏡金吾
 阿波國小鳴戸
 人名若也

沙風



大石氏僕

八助の播磨國赤穂在の豊元末末
 石氏の僕より彼侯大變の後大石邦登
 る旅支那の向城小止宿を八助此野
 来りて老の命のりる念記玉のれと
 義雄よりきて荷造りて座右の物は
 されとんと金ひと包にたれ八助投下
 て立腹はかるおんよそ来る已むわら
 んと流しと涙をぬき雄これおまを
 してとてまよりる途編笠かひり土の後も奴
 僕供へて堤の上を行つた運死て八助
 上是開ちてし已若し東都都勤
 ののまらるる俱く吉原通一さるる
 こゝろ念記とさういふせかれは
 納め公より大石東丸く後三面思乃
 同月同日病て没しぬ実深き主従の
 縁とあり○さのあめの末期の吟

阿波

隆達(りゅうたつ)日蓮宗(にっぜんしゅう)の僧(そう)を京州(きょうしゅう)堀頭(ぼりず)本寺(ほんじ)の院内(いんない)に住(す)む者(もの)を生得(なまじり)其(その)まゝに
 うる発声(はつせい)する時(とき)人の耳(みみ)を傾(かたむ)けしむる
 一流(いちりゅう)の音曲(ねまが)と唄(うた)出(い)で世(よ)の人(ひと)隆達(りゅうたつ)
 節(ふし)と唱(な)ふ然(しか)も頓智(とんち)ある何(なに)もあれ
 題(だい)は即(すなは)ち即(すなは)ち坐(ざ)す文作(ぶんさく)と只(ただ)唄(うた)
 其(その)沙汰(さた)堂上(どうじょう)のまこととて或(ある)年(ねん)大内(だいない)
 召(め)する折(せ)も暴風(ぼうふう)吹(ふ)きおきて御簾(ごすだ)もあ
 けしむる程(ほど)のりか良(よ)あつて止(と)める此(こゝ)有(あ)る
 様(さま)直(ただ)唄(うた)へともあむおどろきあむ
 上(う)つ鴈(かり)のうはアとや
 御感(ごかん)あつてあまの褒美(ほうび)あるのり
 今世(いまよ)流行(りやうぎやう)三頭(さんず)渡(わた)り一掃(いっさう)する
 めえ祖(そ)とあつて後(ご)還(かへ)俗(ぞく)する
 大坂(おおさか)小出(こいで)茶種(ちやうしゆ)買(か)入(い)り
 貞徳(さだのりく)の松(まつ)永久(えいきう)松(まつ)秀(ひで)元(もと)息(いき)勿(な)れ名(な)勝(かた)
 熊(くま)と云(い)ふ矢(や)と捨(す)て風雅(ふうが)の道(みち)不(ふ)
 成(な)る長(なが)ても鬘(まげ)と束(たば)ね童(どう)の服(ふく)
 師(し)とて和歌(わが)とて後(ご)非(ひ)諧(わい)
 我(われ)菴(あん)のかつらふ稻荷(いなご)を劫(ご)つて去(さ)る
 花開(はなひら)宮(みや)と称(なづ)け賀詞(がご)の歌(うた)か
 此(こゝ)の代(しろ)をさしめしやうの秋(あき)の
 此(こゝ)の代(しろ)をさしめしやうの秋(あき)の
 の名(な)をたまたまの世(よ)に又(また)秋(あき)の
 甜(あま)みとてふのれをたまたまの雨(あめ)
 冬(ふゆ)ごりの虫(むし)掃(は)きまをあると
 能(よ)諧(わい)の式(しき)全(ぜん)くさだまりの此(こゝ)翁(おきな)
 ありの所(ところ)あり



歌(うた)

哥(うた)

五(ご)十一(じゅういち)

宗祇其号と自然翁又種玉菴
 ともふ紀修国在田郡藤並庄の人
 ありといふはあつたかたのまふふかき
 孫考て諸苗代無我の曰惜のを
 まるんと欲を無我の曰惜のを
 十年開の九連歌の二十年の功を
 宗祇 手ぬのりかじと宗祇
 ときてあつた十年春夜まふふか
 無我大さ感とて我かふふふか
 ぶとのりとてまふふか
 八月朔の夜のち曇るるるるるる

○ひとせの月とくろまを
 ○世おぬるるるるるるるるる
 桃替まら此のり甘心と
 ○世あるるるるるるるるる
 文龜二年七月相州箱根乃
 易んか反干時八十二才るる

○山居あつたこれいづれもか
 ○ひとせの雨妻のるるるるる
 ○一代小秀吟多
 ○花梅やかたぐりも神の
 此花梅のり独吟千包乃
 兼方もまたくもも林邊山
 と縁の松月みひのまの

宗祇法師



別の
 ふと
 宗祇法師

若木田守妻



え
 神代の
 守妻

丈山俗唱如左清門重之云詩仙
堂六山人等其先士
兼寺村の世方れとも只早言相
詩をうけ歌と詠奉と身の樂
と抱憂やあひん〇こころするの
秋を詠とよま糸へるのゆら
かありとも貞徳さまきて年
の周をたわむらんあぢ已を
りてきてあぢての契りとも
〇いまだよきる流れる石川や
せこの小川のいりてよとまん
あつひあつひとえ寛文十二年
壬子歳五月廿九日九十歳にて
没其遺物數種今於彼地
あり

子江國の一城王某の
嫡子にて俗稱木下若狭守勝
俊と云航尾州小居住を生ま
て和歌と嘯の心ふく後其
職を辞し東山の隠道一
翁公羽又長嘯とよぶ或
時志賀の化木杖をむして
琵琶湖の春の行旅惜と
ある時嵐山の紅葉を見て吐
月橋よ月とをる採心のまふ
風月山水をのてあてひふそ
北山大原野の菴をうり
和歌若干と綴りて是を
白集と題を今猶世に
ありたり



頓阿其父の梶井の執當源全
 又良阿と久る人の子にて初の名
 と云ふ事と云ふ比叡山に住して
 高野のありての感空と号す京
 小から四余の金蓮寺小入て
 頓阿と改む其の各名をの秋
 人中の浄弁の慶雲の兼
 好の頓阿をさして和秋の四天
 王と称せり
 ○のづから情や性のもつて
 かるるありはあかひのそとを
 年光て西行の後と云ふ東
 山双林寺ふまむのあかひのそ
 の縁のそとの秋より文中元年
 の西才より寂ま

野の立圃の俗姓雜屋市兵
 衛と云は人古今の愛藝あり
 烏丸光廣の弟として和秋と云
 く詠尊朝親王の書法をさ
 て名筆あり畵へ又狩野探幽
 小まゝ俳諧の自徳の門人小
 てりともり上手のまゝあり
 ○の如やあせもほろも夕枝
 のほろ火の川の脊中此のい
 ○ふろをうつひあはれ也之田原
 又将世のり
 ○月影のる目としまあせ
 七十一才也と云ふ

阿部法所
 わく見ぬ
 友の
 とは
 もの
 下
 も



野の立圃
 夜
 の
 東
 山



正宗の文永元年相模國鎌倉
 今小路に生れ父藤三郎光行
 父の早くつれて十七才の時
 新藤吾国光の弟子となり素
 之諸國を修行して京都の東
 東山に住し楠正成の所望
 として一振の太刀と打刀を希代
 の名刀ありしとぞ後古跡鎌倉
 あり源氏山の麓ありむ今も此
 所を正宗屋鋪とよみ○ありぬ
 だの款いけ地ありて源氏山
 の山峯ふ入る二日月とて詠
 しものとき九此天下の名高
 き刀鍛冶の正宗が弟子あり
 ありりとの名是をそ名入る
 ともあり

山口郎豊一肥後國某
 侯の臣あり天性俳諧の道
 達し主家滅亡の後難發
 て宗因といふ又梅翁ともよ
 難波にまゐり○白つゆの句
 あり名高し又
 ○世の中やてあつてまわれかむあれ
 ○いりあはれ世をのこるはとむを
 ○おまの世をのこるはとむを
 ○梅と松あわの社のいさむとむ
 是の難波天満ありし一雨の句
 あり後江戸ありて世とま
 此人は是俳諧談林凡の元
 祖あり



此は入道
 新の
 日
 ありり
 ありり



山宗因
 ああや
 ありり
 ありり

詞館

千利久の足利氏知多殿
四良の足利家
若くは時足利家
同朋の足利家
宗易ともよぶ茶の乃う
如ある事い世の人の知る
所なり又和歌をもよくと
よくあその歌い殿の演小
夜網ひけるさまを
いそいのみやや都紫野
ある大徳寺の山門に我木
像を置るのふよりてを終
をよくせむを惜むべし

千利久

おの細の

やうな

ゆげと
あま
あま
あま



